

「環境レポート」は法に基づく環境アセスの代替として「技術的レベルで同等のものを実施する」とした調査の中で作成されたものです。つまり事業遂行を前提として、環境影響（環境への悪影響）を調査するものです。

しかし、この徳山ダム導水路事業（木曾川水系連絡導水路事業）では、事業費の65.5%（約583億円）が「異常渇水時の緊急水補給 - 河川環境改善 - 」に充てられます。つまり主要な事業目的が「河川環境改善」なのです。

ところが、この「異常渇水時の緊急水補給 - 河川環境改善 - 」の科学的根拠は示されていません。「科学的根拠らしきもの」は専門家によって「小学生の夏休みの自由研究以下」「自分の頭がおかしくなったのかと思うくらい滅茶苦茶」と酷評されています。

河川環境改善にならない事業であれば「悪影響が少ないかどうか」を検討するまでもなく「不要な事業」です。「環境への影響は小さい」「変化は少ない」との記述が並ぶ「環境レポート（案）」を見れば見るほど、「583億円をかけるだけの環境改善効果はない」と確信してしまいます。

この問題意識を前提に質問します。

#### <局所混合(長良川・水温予測結果,「あらし」p25)シミュレーションの意味が分からない>

すでに1ヶ月半にわたるやりとりがあるので、簡単に記します。

Q：この局所混合シミュレーションでは「水温・SS・BOD」について調査しているが、それを示されても、河川環境 - 生態系にどういう影響があるかは分からないが？

A：完全混合シミュレーションだけでは不十分と（環境検討会）指摘されたので局所混合シミュレーションを行った。これが生態系にどう影響するか、という話はまだ...

Q：「2次元平面モデル」ということだが（3次元であるべきかどうかは横におくとして）、どういう水深の数値を入れて計算しているか。

A：（当初 1.0 mとしていたが訂正があった）0.5m の水深の流向と平均流速を用いている。参考資料 p98 - p99 のような計算式を用いている。

Q：緊急水補給は「正常流量に近づけるため」「0.3m の水深がないと魚類に悪影響があるから」と説明されてきた。0.5m の水深の流向と平均流速を用いて計算したシミュレーションが、異常渇水時において、どういう再現性（予測としての正確性）持つのか素朴に疑問だ。

A：H18・19年度に調査したが、そんなに大きな渇水はなく、水深 0.5m が妥当するようなどきしか実測できなかった（忠節地点流量 50m<sup>3</sup>/S か 60m<sup>3</sup>/S 程度。ADCP 装置を用いて測定）。

Q：「0.3m の水深が確保できない」状態のとき（忠節地点流量が 30 m<sup>3</sup>/S を遙か下回るようなとき）の予測として、水深 0.5m のときのものを用いて、意味があるのか（予測の正確性はどうか）。非常に浅いときは、大きな石一つが川底にあれば、流向は変化する。この辺りはどうか。

A：10m 四方のメッシュを採り（1万箇所くらい）それぞれ流向（ベクトル）を2次元で分解して用いた。そのメッシュごとの数値は業者（コンサル）から成果品として受け取っていないので数値は判らない。多分、浅いところはそれなりの数値を使っていると思う。

忠節地点流量 50m<sup>3</sup>/S と 70 m<sup>3</sup>/S で再現性を確認している。

Q：忠節地点流量 50m<sup>3</sup>/S と 70m<sup>3</sup>/S では、緊急水を補給するような異常渇水時とはほど遠い。

他方「平六渇水時の環境被害データはない」と国会の質問主意書の答弁書で言い切っている。そのときにH18・19年度の予算で、定量的な効果も調査する、としている。

この局所混合のシミュレーションと「影響は小さい」という結論を見る限り、583億円をかけて河川環境を改善する、という事業目的に、科学的で正当な根拠があるとは思えないが、如何？

# 徳山ダム導水路問題

